

沖縄県立博物館・美術館の 「沖縄戦—失われた文化財」展示

長谷洋一

今年は戦後70年にあたり、各地の博物館や資料館では戦争や戦時下での市民生活に関わる展覧会が数多く開催され、出征兵士を見送る人びとの姿や空襲の被害を伝える写真をはじめ、軍隊手帳や軍服、軍靴、戦時中の衣服や防空頭巾、軍事郵便、慰問袋など様々な資料が展示されている。戦争や戦時下の暮らしを取り上げた展示は、博物館での常設展示(通史展示)のコーナーとして取りあげるところもあり、また自治体による「平和資料館」や厚生労働省が設立した「昭和館」や「しょうけい館(戦傷病者史料館)」など戦中・戦後直後の生活に特化した博物館・資料館も設立されている。

先の戦争で失われたのは、多くの尊い人命や日常生活であることは言うまでもないが、物言わぬ文化財もまた戦争の被害を大きく受けていたことも無視できないことがらである。

文化庁からは1983年に『戦災等による焼失文化財 建造物篇』・『戦災等による焼失文化財 美術工芸篇』が、2003年にも『戦災等による焼失文化財 20世紀の文化財過去帳』が刊行されたが、各地の博物館や資料館で戦災による文化財被害を展示しようとする動きは少ない。そうしたなか、沖縄県立博物館・美術館の常設展示でそのことを伝える興味深い展示が行われているのでここに紹介したい。

沖縄県立博物館・美術館は、2007年11月に那覇市おもろまちに開館した。同館の概要については、既に本紙56号で米田文孝教授が紹介されているが、博物館常設展示室(総合展示)の一角に「沖縄戦—失われた文化財」の展示コーナーがある。(写真1)

1945年3月から始まった「鉄の暴風」とよばれた沖縄戦によって破壊された首里教会や焦土と化した那覇の町を撮影した大型写真パネルを背景にして、旧一品権現梵鐘・首里城正殿前の大龍柱・内間御殿「致知」扁額・首里城歓会門石獅子・崇元寺下馬碑(西)・旧波上宮朝鮮鐘龍頭・旧天竜精舎梵鐘の各資料が、被災を受け

たそのままの状態で見られている。いずれの資料も琉球王朝の文化と歴史を語るに欠かせない資料群であるが、お世辞にも「展示」とは言い難く、無造作に置かれているといつてよい。

首里城正殿前の大龍柱や崇元寺下馬碑(西)は無残にも折られて横たわり、その横では一部が欠けた歓会門石獅子がころがっている。旧一品権現梵鐘は銃撃を受けた穴が残り、胴(草の間)には大きな傷がみられる。龍頭も失われ、乳や下部(駒の爪)の一部も欠損している。

旧波上宮朝鮮鐘は成化3年(1467)に朝鮮から琉球にもたらされたものだが、沖縄戦で梵鐘本体は失われ、残った龍頭のみが置かれている。

コーナー右側手前にある旧天竜精舎梵鐘は比較的損傷が軽いようにみえるが、乳の一部が欠け、切れ込みやへこみが随所に残っている。旧天竜精舎梵鐘は浦添にあったとされる天竜寺の梵鐘で、既に18世紀初めには天竜寺は廃寺となっており、梵鐘は首里の天王寺、安国寺に移された後、1944年に金属供出の対象となった。損傷は金属供出後に出来たものである。戦後になって梵鐘が鳥取県青谷町(現鳥取市)の弥勒寺に現存していることがわかり1962年に沖縄県へ返還されている。

被災した状態の展示資料や一見無造作にも見える展示手法からは、沖縄戦による文化財破壊の凄まじさや戦時下での金属供出の様相が伝わってくるのだが、内間御殿の「致知」扁額は沖縄戦終結後の文化財被害をも明らかにしている。



写真1 「沖縄戦—失われた文化財」展示コーナー



写真2 左から旧一品権現梵鐘、首里城正殿龍柱、崇元寺下馬碑、旧波上宮朝鮮鐘龍頭、「致和」扁額

「致和」扁額は、第二尚氏の開祖である尚円王が即位前に居住した西原町の内間御殿正門に掲げられていた扁額で、乾隆3年（1738）に第13代国王尚敬王による揮毫である。沖縄戦終結後アメリカ軍に接収され、その際に扁額を便器として利用するために右側に大きな穴が開けられている。（写真2）

よくみると、展示資料はレプリカではなく、すべて実物資料（一次資料）である。そのことに気付く時、よりいっそう沖縄戦やアメリカ軍による文化財の深刻な破壊・毀損の状況が、展示資料を通して痛切に理解できる。

戦争や戦時下での生活に関わる展示は、戦争の実態や当時の人びとの暮らしに焦点をあてるのが展示の常套手法と思いがちな筆者にとって、沖縄県立博物館・美術館の「沖縄戦—失われた文化財」展示コーナーはかなり意外な印象を受けた。このほかにも「忍び寄る戦争」「沖縄戦の住民被害」の展示コーナーもあるが、日本で唯一戦場となった沖縄での戦争展示としてはいささか隔靴搔痒の感が否めないこともない。そうしたなかで「失われた文化財」展示コーナーは逆に観る者に強い印象を与える。

こうした展示は、沖縄県立博物館が歴史や文化、自然を含んだ総合博物館であり、各分野のバランスや歴史分野に関しても先史時代から現代までを扱うため限られたスペースで展示しなければならない事情に加え、沖縄戦の実態に特化した施設として既に沖縄県平和祈念資料館、ひめゆり平和祈念資料館があり、同じコンセプトで展示するよりも文化財の破壊・焼失などを通して戦争被害を伝える方針を採用したことに

よるとされる¹⁾。

ただ戦争によって破壊・毀損を受けた文化財をそのままの状態で開催することに戸惑いを感じる向きもあろう。一般的には破壊・毀損された文化財は修復や復元を通して出来る限り製作された当初の姿にもどし、当時の歴史や文化を語る資料として扱われるが、そこには文化財が受けた戦争被害の痕跡は残らない。戦災による文化財被害を展示することの難しさでもある。

沖縄県立博物館・美術館の前身でもある沖縄県立博物館（那覇市首里大中町に所在した）では、1995年6月に太平洋戦争・沖縄戦終結50周年事業として「甦る沖縄・戦災文化財と戦後生活資料展」が開催され、沖縄県内外のみならずアメリカにも流出した文化財を一堂に紹介している。こうした長年の学芸員活動の蓄積と英断があったからこそその常設展示企画といえる。

沖縄戦によって喪失・毀損した琉球・沖縄の文化財は本土に比べて桁違いに多い。世界文化遺産となった首里城正殿や園比屋武御嶽石門、玉陵などは琉球政府時代からの努力が実り復元されたが、まだまだ戦争の爪痕を残す戦災文化財が数多く残されたままとまっている。金武町観音寺所蔵の旧天界禅寺梵鐘（沖縄県指定有形文化財）は胴部に砲弾を受けた大きな穴が開いたままであり、琉球漆器や紅型などの工芸品は、作品の喪失はもとより生み出した技術伝承そのものが絶たれている。

現在、「琉球王国文化遺産集積再興事業」として戦争によって失われた琉球王国時代から継承されてきた有形・無形の文化遺産を学術的知見や科学分析などを通して資料がもつ情報を集め、その上で当時の技術でもって復元を行う事業が進められている。戦後70年を経て沖縄の戦災文化財の復興はこれからまさに始まろうとしている。

写真掲載にあたりましては、沖縄県立博物館・美術館より御高配を賜りました。あつく御礼申し上げます。

1) 岸本弘人「博物館の戦争展示」沖縄県立博物館『学芸員コラム』048 <http://www.museums.pref.okinawa.jp/museum/column/column048/index.html>